



Title	堀田善衛と中国：「上海体験」に始まる初期作品の形成と展開
Author(s)	曾，嶸
Citation	大阪大学，2012，博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27265
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	ŹĒNG, RĒNG (曾 嶸)
博士の専攻分野の名称	博 士 (文学)
学 位 記 番 号	第 2 5 6 9 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	堀田善衛と中国 ―「上海体験」に始まる初期作品の形成と展開―
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 清水 康次 (副査) 教 授 出原 隆俊 准教授 橋本 順光 愛媛大学准教授 中根 隆行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、堀田善衛の初期の文学活動について、戦争中からの1年9カ月間の上海での生活が戦後に書かれる作品の出発点となったことを明らかにしつつ、初期作品を改めて読み直し、また、その後の堀田文学の展開を中国ないし中国文学との関わりに着目して検証しようとするものである。分量は、400字詰原稿用紙に換算して約450枚である。

第一章では、「上海体験」以前の戦中の堀田の文学活動を調査し、詩と評論を中心とする活動が、戦時下の状況と戦争の正当化や民族主義の主張などの当時の文壇の時流の影響下にあることを述べる。代表的な評論として「西行」(1943)に注目し、この評論が小林秀雄の「西行」(1942)の歴史観・古典観に依拠するものであることを確認しつつ、両者を比較して、なお堀田独自の着眼の方向性を探ろうとする。

第二章では、敗戦を挟む1945年3月から1946年12月までの「上海体験」について、日記の文章を中心として詳細な調査を行ない、この短い期間に、「日本の軍部という統制機関に対する失望」と「国民党政府に対する不信」という二度の失望を繰り返し、政治的にはあい反する二つの公的機関がいずれも頼むに値しないという認識を重ねて、堀田が「個人以外のものは信じまい」という思いに到る経緯を明らかにしている。

第三章では、戦後、文壇の注目を浴びた「広場の孤独」(1951)について詳細な読解を試み、主人公木垣の認識の深まりと「行動する人間」への変化を作品の展開の主軸と捉え、周囲の多様な人物たちと木垣との関係を、その展開を促すものとして点検していく。そして、組織に参加せず一個の人間として生きていこうとする木垣のあり方には、第二章で見た、「上海体験」から得た認識の投影があると論じている。

第四章では、「広場の孤独」と、その前に書かれた「祖国喪失」(1948～1950)が共通

のテーマを持つと指摘する。連作「祖国喪失」が、戦争中の上海租界を舞台として、多様な人物たちがそれぞれに戦争に依存し、戦争への「共犯者」である姿を描いているのに対して、「広場の孤独」でも、「コミットメント」をキーワードとして、多様な登場人物たちがすべて戦後の国際紛争や対立にまきこまれ、また加担していく存在であり、被害者性と加害者性とを同時に持つものとして描かれているとする。

第五章では、堀田文学の新たな展開として、「歴史」(1952～1953)に注目し、「文学の中に現代史を収斂しよう」とする意図の下に、茅盾の「子夜」(1932)の方法に学んで書かれた作品であることを明らかにしている。堀田と茅盾の文学との関わりを検証し、両作品を丹念に比較して、冒頭部分の手法の類似や時間を意図的に用いた構成の共通性を浮かび上がらせている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

堀田善衛の文学は、戦後の文学史において重要な位置を占めるものであるにもかかわらず、先行研究は少ない。特に、後期の作品は注目されることがあっても、初期の作品は十分に論じられてきていない。堀田の初期作品は、戦中・戦後の混乱状況の中で、上海という特異な場所をきっかけとして生み出されたものであり、また、緊迫する国際情勢を強く意識したものであつて、戦後の現実に根ざした、複雑なまた重要な作品といえる。本論文は、そのような堀田文学の解明において多くの成果を上げている。

①第二章において、詳細な調査を通して、敗戦時の堀田の思いや中国側の機関に加わる際の心理の変化など、「上海体験」の具体的な実態を明らかにした点。また、その体験を通じて得た認識が戦後の堀田文学の出発点となったことを示した点。②第三章・第四章において、「広場の孤独」と「祖国喪失」について詳細な分析を行ない、新たな読みを提出した点。そして、従来、政治が人間の主体性を奪う姿を描いた作品として読まれてきたことに対して、むしろ、そうした「共犯」や「コミットメント」は不可避免的に生ずるものであり、そのあり方を本人が自覚できるかどうかという問題こそ堀田が描こうとしたものであると論じた点。③第五章において、「歴史」と「子夜」との詳細な比較を示し、戦後作家の中国文学との関わり的一面を明らかにした点。これらは、堀田善衛の文学に対する新しい研究成果として高く評価される。

一方で、本論文には未熟さや視野の狭さが見られる。作品の読み方にはやや強引さがあり、柔軟に自説を顧みる姿勢が不足している感がある。戦中・戦後の上海や国際情勢についての知識も幅広いものとはいえず、言及している人物や文献についての理解にも不十分な点がある。「上海体験」についても、一面のみに終始せず、多くの可能性を孕んだカオスのような体験として捉えていれば、堀田文学の多面性と結びつけられたのではないかと考えられる。課題をいくつも残しているといえるが、そのことは逆に、広い知識と視野を得ていけば、さらに多くの成果が期待できるということでもある。

以上の問題点は、本論文が挙げた研究成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。